

「モデル小説」からみる
プライヴァシーの近代

日比嘉高

第5回

島崎藤村、写実小説のジレンマ 1 〈藤村神話〉

1 〈藤村神話〉

1・1 島崎藤村について

【資料1】 「島崎藤村」『増補改訂 新潮日本文学辞典』新潮社、一九八八年一月

1・2 〈藤村神話〉

▼小諸く出京時代の藤村

【資料2】 十川信介 「島崎藤村年譜」『群像 日本の作家4 島崎藤村』（小学館、一九九二年二月）

■引用1 ■三好行雄 「解説」『藤村全集』第三巻

「三児の死は藤村にとって、『破戒』完成のための〈犠牲〉、みずからの芸術に捧げたいけにえにほかならなかった。文学者としてかく生きたという自負とはうらはらに、そのことへの痛恨もふかい。」

【資料3】 藤村「芽生」『中央公論』一九〇九年一〇月、のち『藤村集』博文館、一九〇九年二月）

【資料4】 藤村「三つの長篇を書いた当時のこと」『読売新聞』一九二七年四月二三・二四日、のち『市井にありて』岩波書店、一九三〇年一〇月）

1・3 「突貫」という鍵

▼「突貫」……『太陽』一九一三年一月発表。その後第四短篇集『微風』（新潮社、一九一三年四月）収録。

● 突貫 Ⅱ 『破戒』執筆時代の心情

● 『破戒』執筆時代を描くことにより、「危機を超える新生の方向を文学的出発機の初心にさぐる」とした「三好行雄「解説」『島崎藤村全集』第五巻、筑摩書房、一九八一年五月）

⇐

この把握は「突貫」の理解として正当ではある。だが、「モデル問題」を引き起こし続けた作家としての藤村を考えると、これほど面白いテキストは他にない。〈藤村神話〉の背後を読みみたい。

1・4 注目したい「突貫」中のポイント

- 小説というメディア——創作と発表
- 「名のつけやうの無い恐怖」

2 島崎藤村と写実の時代

2・1 写実主義の勃興と藤村の歩み

▼ 明治三〇年代——詩から小説へ

【資料5】 和田謹吾「浪漫主義から自然主義へ」『明治の文学 日本近代文学史1』有斐閣、一九七二年六月

【資料6】 井出孫六「解説」『千曲川のスケッチ』岩波文庫、二〇〇二年二月

2・1・1 『若菜集』

藤村の第一詩集。東北学院の教師として赴任していた、仙台時代に書かれた。恋愛を浪漫的に歌い上げ、かつ宗教性・形而上性も兼ね備えた詩集と評価される。

■引用2 ■ 『若菜集』（春陽堂、一八九七年八月）

初恋

雲のゆくへ

まだあげ初めし前髪
林檎のもとに見えしとき

庭にたちいでたゞひとり
秋海棠の花を分け

前にさしたる花櫛の
花ある君と思ひけり

空ながむれば行く雲の
更に秘密を聞くかな

やさしく白き手をのべて
林檎をわれにあたへしは
薄紅の秋の実に

人こひ初めしはじめなり

わがこゝろなきたためいきの
その髪の毛にかゝるとき
たのしき恋の盃を

君が情に酌みしかな

林檎畑の樹の下に
おのづからなる細道は

誰が踏みそめしかたみぞと
問ひたまふこそこひしけれ

2・1・2 『落梅集』

藤村の第四詩集。詩文集である。小諸義塾の教師として赴任してから二年の間に詠まれた。藤村が詩から散文へ向かう軌跡をとどめている。

【資料7】 『落梅集』（春陽堂、一九〇一年八月）

隨筆・紀行集。小諸義塾時代の「物を見る稽古」の成果（一八九九〜一九〇五）。公表は一九一一年（『中学世界』に一二回連載）である。自からの文学的変革のために、千曲川畔の人や自然を克明に観察し、描写しようとした試み。藤村自身「ある意味から言へば、自分の散文はこのスケッチから出発したとも言つてもいいのである」（『選集上巻の序』）と述べている。

【資料8】 『千曲川のスケッチ』（佐久良書房、一九二一年二月）

2・2 「はじめて産れたる双児」の発禁——「藁草履」と「旧主人」

■引用3 ■藤村書簡、田山花袋宛、一九〇五年一月九日

「……信州諸新聞紙の報により、又馬場「孤蝶」兄よりの通知により、『旧主人』の法に触れたるを確かめ申候。はじめて産れたる双児（「旧主人」と「藁草履」）の一は世の光を見ること僅に一週にして死せり。笑ふべく憐むべきは小生が新しき旅路の発足に御座候はずや。」

「旧主人」 『新小説』一九〇二年一月。「藁草履」と並ぶ島崎藤村の実質的小説デビュー作。藤村の恩師である木村熊二の家庭をモデルにして描いたとされている。発表後、約一ヶ月後に発禁処分を受けた。当初は作品末部の「接吻」の描写が原因と言われたが、少し後には、恩師の家庭を描いたことに対して『信濃毎日新聞』の記者であった山路愛山が立腹し、それが発禁へとつながったという説が出された。いずれも真偽は不明のままである。

2・3 同時代評など

■引用4 ■秋暁、烏水「文芸雑俎 藤村氏の二新作（『藁草履』と『旧主人』）」「明星」一九〇二年二月
「内務省のお役人の神経過敏なるには、小生も舌を捲かれ候、あのために『新小説』は発売禁止に相成候とか」（小島烏水）

■引用5 ■編集局同人「近刊合評 旧主人」「文芸界」一九〇二年二月
「併しあすこの所が内務省のお役人様の目に触れて、発売禁止になつた為め噂はパツト全国に広がつて、日頃小説嫌ひの誰れ彼れまで、我もくと大騒ぎをして却つて多数に読まれたさうです。作者、書肆、寧ろ以て榮とすべしではありませんか。兎角『臭いものに蓋』主義の結果は得てかういふ滑稽を演ずるものですて。」

■引用6 ■「風俗壊乱の小説」「文章世界」一九〇八年五月
「島崎藤村の『旧主人』がやられたのは、其の終りの所に、男と女とがキツスする様を明らかに描いたからだといはれるが、併し、この頃、山路愛山が文芸講演会でしゃべつたり、『国民』の『書齋独語』で書いた所に依ると、其の条下よりは寧ろ、この作が、旧の主人のことを書いたといふので、不埒なツ、といった訳であつたらしい。作物が風俗を壊乱するといふよりは、作者が忘恩であるといふ實際道徳から来た訳なんだ。」